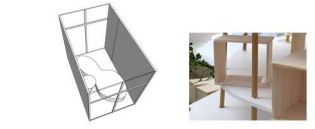
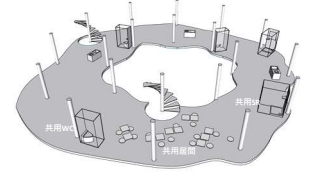


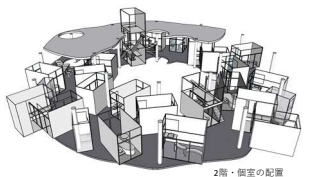
1.8×3M×H2.5×2 家族用個室
1.8×3M×H6 家族用個室



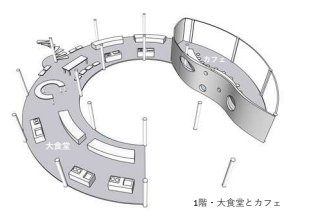
1.8×3M単身用個室



3階・共用スペース

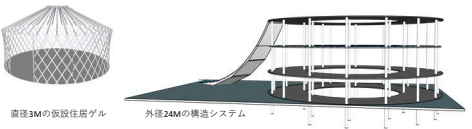


2階・個室の配置



1階・大食堂とカフェ

アイソメ図



直径3Mの仮設住居ゲル
外径24Mの構造システム

流動する共同体

コンセプト

狩猟採集時代の公有制、蓄えない生活、移動性、助け合うことから生まれた求心力の特性を取り入れ、円形の環（スラブ床）を設け、1.8×3Mの最小限個室だけを個室に設置し、ほかは全てオープンな共用スペースに。子育て家族、高齢者家族と単身者による住民で構成され、「土地」の公用、空間的な触れ合い及び日常の助け合いの関係から、共同体意識を育む。コミュニティが硬直しないように5分の1の住戸はモンゴルの移動住居ゲルにする。流動性を持ちながら、共同生活のノウハウを次の世代へ伝え続けることを狙う。

ダイアグラム

住戸構成

50戸のうち、子育て3人家族は8住戸、高齢者夫婦は4住戸、単身用個室は28住戸と10個の移動住居ゲルからなる。ゲルは住民の家族構成の変動に対応できる。また、短期留学生や国内外の観光客などのゲストの滞在にも対応する。

「土地」の共有

敷地と重層の円形の環（スラブ床）は住民が共有する「土地」である。個室は最小限にして、単身用1.8M×3M、3人家族用はその2倍の面積に設定する。厨房・台所・食堂・トイレ・シャワー・大浴場・デスクワークスペース・収納などは、全て共用にした。

最小限と最大限

個室を最小限の3層程度にして、共用スペースを最大限に広げ、業務用調理器具付きの食堂や露天風呂付きの大浴場、大人から子供まで利用できるデスクワーク（スタディ）スペースを享受できる。

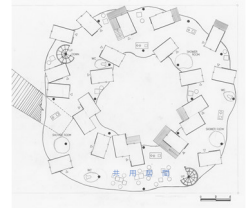
内と外

従来の集合住宅の壁を共有する均一な住戸計画と決別して、個室は戸建て住宅のように離れて配置し、そうして生まれた大の間の間は、個人や近隣との共用屋外空間になる。また、共用スペースは全てオープンにするが、必要な時にゲルの壁体（ハナ）を被覆して、囲み込むことによって外部空間は内部空間に変身する。

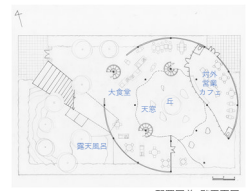
都市性と精神性

重層の環の中心に、緑の丘を設ける。夜になると、地下空間の天窓から漏れてくる光は、光柱になり、環の中心は昼も夜も住民の心の拠り所になる。また、公道からアクセスできる大階段を設け、平日は地域の人の思いの場として提供する。神社の祭りの際は、神輿が大階段から集合住宅の4階テラスまで運行する。集合住宅に都市性と精神性を与える。

集合住宅を我が家と考える人生の住処へ



3階平面図



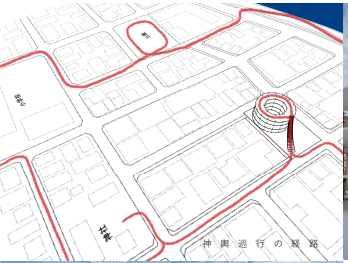
配置図兼1階平面図



地下1階平面図



現代社会における新しいコミュニティのあり方「流動する共同体」を構築するための集合住宅システムを提案する



神輿運行の経路



経営管理システム

管理システム名：LSS (Livelihood Sharing System)

本集合住宅案では単身及び家族の利用者以外に、食堂・浴場・倉庫・各フロアの共用スペース、対外営業のカフェの経営者を住民の中に誘致する。

共同生活で培われた住民の絆によって、子守りや老人の健康状態に気づける環境になり、共働きの子育て家族や在宅勤務、職住一体など多様な働き方に対応できる集合住宅となる。

住民構成の多様化と流動性を実現させ、多様な働き方に対応できるような「分譲+賃貸+民泊」のハイブリッド経営形態をとる。

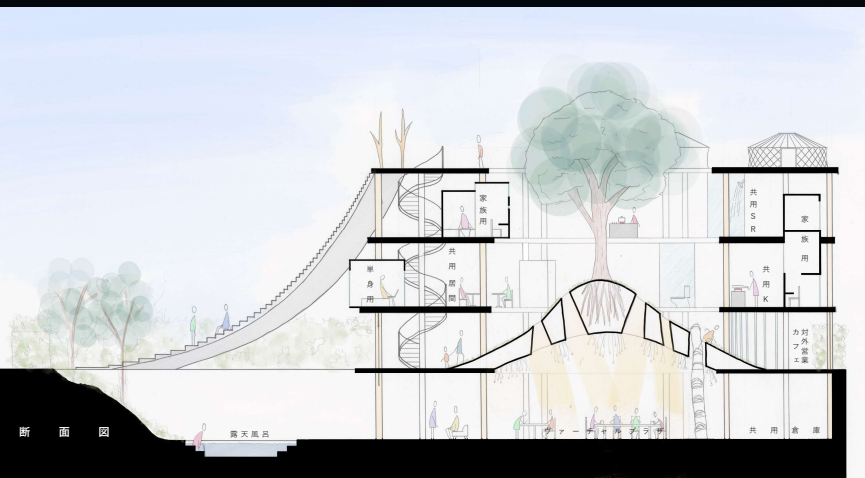
IT技術を駆使し、以上のような多様な選択肢を提供できる管理システムを構築する。本コンペ案では、ホテルで使われているPMS、航空券のGDS予約システムの技術をベースに新しいIT管理システムLSS: Livelihood Sharing Systemを提案する。



新築のイッグルの中心居間
チベット僧院のキッチン



最後の遊牧都市ウランバートルの風景



断面図

仮設住居のゲルは国内外の短期滞在者も利用できるように設定し、共用スペースは英文化が触れ合う空間にもなり、グローバルな共用空間の使い方は結論して「環」になる。